

なぜ「日本の生活」を論じるのか

畠 山 香 織

要 旨

本稿は、中国人による日本文化研究の中で、日本の生活文化の特徴が如何に論じられてきたかを考える。日本に留学し、長期滞在した中国の文化人が著した日本論の研究は多いが、近代以降の不幸な両国関係による民族の恩讐が深いため、歴史、思想、社会、国際政治等や民族感情にまつわるものが主流になっているのは至極当然である。本稿は、そのような趨勢を認識したうえで、より一般の人間生活に根ざしている生活文化についての観点を拾い上げ、中国の文化人がなぜ「日本の生活」を論じるのか、どう論じたのかを考察する。周作人の『日本管窺』その他の著作、郁達夫の『日本の文化的な生活』その他 1930 年代頃の雑誌に見る言論などを対象に、日本の生活文化のどのような特性を見出し、どのように評価、批判をし、本国のものとの対比を行ったのかについて検討する。さらに、往年のこれらの典型的な日本文化論に対して、今日の中国の研究者が如何なる発言をしているかにも言及する。

キーワード：生活文化、周作人、『日本の衣食住』、郁達夫、『宇宙風』

はじめに

筆者は、中国人の手による日本文化研究を課題の一つとしている。先行研究も多く、特に近年の研究成果は多方面にわたっている。しかし、国家間や社会の雰囲気を見ると、日中間の心理的距離はむしろ開く一方で、歴史問題などの敏感な話題が常に先行し、情報過多な時代なのに感情抜きで相手を公平に観察、分析、評価することがますます困難になっている。中国人の日本研究は歴史や政治、国際関係等の問題研究が主流を占めているのは言うまでもなく、いわゆる高所大所からの視点が評価されるだろう。しかし、傍流とは言え、生活という人間社会の基本に注目し、論考を重ねている中国の文化人も少なくない。雑誌『知日』が中国で多くの読者を獲得しているのも事実であり、大衆文化と共に「日本の生活」が彼らを惹きつけているのである。増加する訪日客の日本旅行記の大半はそのような内容で占められている。これを表層的で軽薄な、一時的な狂騒と断じて良いのだろうか。今日の中国人の日本評や日本論は突然発生したものではないはずである。「日本の生活」に対する興味は 100 年以上前から顕著に表れており、現在に至っても不変なものもあれば、変化した印象もある。生活など瑣末なものかも知れないが、文化の根底につながり、最も文化理解の助けになると再認識させられる。

1 周作人が論じる「日本の生活」

(1) 「生活」を注視する意味

周作人には「日本の衣食住」¹⁾ という随筆がある。『周作人伝』『周作人論』などの著書を上梓している銭理群は『读周作人』(2001)の中で、次のように指摘している。

文化を論じる時、まず何から切り込み、何を論じ、つまり題材の選択が肝心である。周作人が「日本の衣食住」をテーマにした理由は三つある。一つ目は、「衣食住三者は生活の中の最も重要な部分」である。二つ目は、衣食住によって構成される生活様式は最も変え難く、それゆえ最も安定性を有している。三つ目はこの題材は自分が「知っている」ことであり、「好き」なことである。銭理群はさらに続ける。「周作人によれば、ある民族(地方)の真の文化的精神は正に大多数の人民の最も普通で、最も安定した日常生活の中に溶け込んでいる。これ自体が一つの文化観である。」²⁾ また、「知っている」「好き」を強調したのも、周作人にとって、たとえ異国の日常生活、民俗の考察でも、個人的であり、ある種の主観的な参与であり、ある種の内在的な探求である。次の引用にも銭理群の考えが示されている。

しかし、最も興味深いのは依然として、それらの風俗習慣の背後に隠れ含まれ、そして周作人が発見した(或は彼の心霊が光を当てた)生活様式、生命形態、審美趣味、等々である。そこで、人々は周作人が繰り返し使用し、総括的かつ評価的な言葉:「適用(使える)」、「簡易(手軽で簡単)」、「清淡(淡く薄い)」、「自然(自然)」、「自在(自由気まま)」に注目する。この生命形態と趣味は平民的であり、かつもとからのものである。周作人をして「東南の水郷」の幼少時代及び「中国古俗」の原始的記憶を思い起こさせた。ここで周作人が発見したのは民族や時代を超越した「人間性」である。(訳引用者)³⁾

ここでの銭理群の指摘は中国人による日本研究を読み解くうえで1つの指針を提示しているように思える。

(2) 「生活の芸術」について

「日本の生活」を論じるという視点に関連する周作人の作品は少なくない。最もまとまっているのが1930年代半ばに書かれた連作「日本管窺」であり、前述の「日本の衣食住」の初出題名が「日本管窺の二」であった。生活を論じるという視点の先行研究として、伊藤徳也の『「生活の芸術」と周作人 中国のデカダンス=モダニティ』(2012)⁴⁾がある。周作人の「生活の芸術」論を多角度から考察し、周作人の日本論を読み解くうえで多くのヒントを与えてくれる。主たる内容は「生活の芸術」という周作人のエッセイを主なテキストとし、1920年代の雑誌『語絲』創刊号に発表されたこの一文について次のように述べている。

彼には「生活の芸術」という短いエッセイがあって、この中に彼自身の「生活の芸術」論の要点がまとめられている。その要点とはつまり、美しく微妙に生活すること、禁欲と放縦のバランス、快樂のための節制、といったことだ。表面的には、頹廢とか毒とは無縁の、実に穏当な主張のように見えるかもしれない。しかしそれらの思想の根本には、実は、中国社会が毒と見なし、悪しき頹廢と結び付けようとするものが密かに含まれていた。⁵⁾

そして、「頹廢的」という批判を浴する周作人だが、「彼の言う頹廢派は、猛烈な「生を求める意志」を持つ極めて現世的な人間であって、不如意な現状に直面してあらがい、悩み苦しむ主体なのだ。周作人はそこに「現代人の悲哀」を見出して共感を寄せた。」⁶⁾ さらに生活とはいったい何なのかという問いを設け、伊藤徳也は周作人が「生活」に明確な輪郭を与えていたと指摘した。少々長文だが引用する。

彼においては、「生活」は生物学的人生観によって規定されていた。それによれば、生物としての人間には目的がある。個体の維持と子孫の存続だ。そして主に前者は飲食欲、後者は性欲が生物としての人間を衝き動かすことによって、人間は合目的な生活を送っている。ここに「生活」の欠かせない根底がある。周作人のこのような生物学的人生観は極めて堅固なもので、本能の抑圧や滅却には執拗に反対を表明した。しかし、その一方で、没倫理的な、あるいは自由主義的な放縦には批判的だった。そこで彼が提示したのが、合理的な禁欲つまり節制だった。それは結局のところ、個体の維持と子孫の存続という動物としての目的を達成するまでの過程を、細分化、複雑化して、引き伸ばすということだ。それはつまりところ頹廢形式化ということだ。その過程を美的なものとして豊富にし充実させる（味わい、享受する）ということが、「生活の芸術」の重要な一面だ。「生活」とは、動物として、文字通り「生きる（「活」きる）ことを根底にして形成された諸形式の集積なのである。⁷⁾

つまり、周作人が規定する「生活」とは生物学的人生観を根底に持ち、本能の抑圧を反対する反面、見境ない放縦も戒めている。そして、「生活」自体を美的なものとして味わい、享受することが「生活の芸術」と捉えている。伊藤徳也によると、周作人は人間性を否定する「偽道学家」を憎んでいた。

そのような道学家の生態と対極的なものに見えたのが、天然を愛好し、質素を尊重するという日本の生活文化だった。彼が日本の生活文化から抽出して珍重したのは「人情美」（人間性・個性そのままの美しさ）や俳味（余韻を感じさせる簡素な味わい）だ。周作人の感性は、畢竟日本文化の中で生まれたものではなく、彼は日本文化の中に無自覚に耽溺することはなかったが、彼が「生活の芸術」論を構成する上で日本文化から得た示唆は多かつたし、また

深かった。⁸⁾

天然を愛好し、質素を尊重する日本の生活文化にシンパシーを感じるのは周作人の個人的な嗜好を抜きにして語ることはできないだろう。同様な環境の中で暮らしても誰しも同じく心の癒しや魂の共鳴を覚えるとは限らない。しかし、個の要素を割り引いても自然な人間生活を抑圧している母国の「道学家」を否定し、異なる「生活」の一つのモデルを提示したとも言える。

(3) 「日本管窺の二——日本の衣食住」について

前述の銭理群が指摘したように、周作人はまず冒頭で自分が日本の生活に愛着を感じる理由は二つあり、一つは個人の性分、もう一つは「思古の幽情」である。「日本の生活に中国の古俗が多く保存されているのを、中国人の自惚れ屋はかえって馬鹿にするけれども、不明もはなはだしいというべきだ。」⁹⁾しかし、日本の生活を気に入ったのは母国の古の文化の痕跡が残っているためだけではない。周作人はまず「日本の風俗を記述した中国人のうち最も理解に富むのは黄公度であろう」¹⁰⁾と『日本国志』『日本雑事詩』を著した黄遵憲に敬意を表しつつ、日本の衣食住について具体的に述べている。

「住」については、まず黄遵憲の『日本雑事詩』を引いている。「家屋はみな地より一尺ほどに木の板を張り、いぐさの席を敷く。入室の際はくつを戸外に脱ぎ、くつただけで席に上る。戸も窓もなく、紙で屏を作り、その下を溝で承けて、随意開閉する。四面みな然り。夏向きだが、冬は具合がよくない。」¹¹⁾「立居はすべて席でじかにする。両膝をつき、腰を伸ばして端座し、さて足で尻の後を支える。趺坐、蹲踞、箕踞のごときは皆不行儀とされる。坐るには必ず褥を敷き、敬客の礼にはもと蓆を数枚重ねる仕方があった。」¹²⁾このように黄遵憲の表現を借りたあと、周作人は日本式家屋が好きだが、あの坐り方はじっさい「骨が折れる」とことわりながらも、好きの理由を「あの部屋の効能の格別あっさりした生活に向いているところだ」と挙げ、さらに日本式家屋を詳しく描写、紹介している。特に、その簡素な造りや調度品を極端に省いた様式の利点につて、自身が留学時の体験をもとにその住み心地を次のように語っている。

四畳半一部屋の面積はわずか八十一平方尺、維摩の方丈よりも二割方狭い勘定で、四壁肅然、下宿屋からは茶具一式が支給されるだけだが、自分で小机を買ってきて、あと座蒲団の二、三枚も揃えれば立派に住めるのだ。机に向って読み書きする際など、前後左右どこにでも本や紙を置けるから、部屋全体が大きな書卓のようなものである。来客は坐りたいところに坐ればよく、六、七人はいってもさほど窮屈なことはない。疲れたらそのままひっくり返ればよいので、わざわざソファを備えるには及ばぬ。夜更けて押入れから蒲団を取り出し、展げさえすれば、そのまま正規の就寝とあいなる。¹³⁾

あくまでも周作人個人の嗜好に合っていたためか、前述の錢理群が述べた「适用（使える）」、「簡易（手軽で簡単）」、「清淡（淡く薄い）」、「自然（自然）」、「自在（自由気まま）」を好む感性が感じられる。住居について、「おそらく中国の家屋は西洋と同じで、どちらも華麗に向いていて、簡陋には向かぬのであろう」¹⁴⁾ という対比も興味深い。ここで周作人が母国の如何なる屋敷を想定しての比較かは想像が難しいが、発言の主旨はやはり調度品を極端に省いた日本の生活環境を意識しているのではないだろうか。ある宿屋について「宿屋の飾り気のない一室で窓にもたれて山を眺め、浴衣がけで畳に寝そべったまま茶を一杯所望して啜る、これはかつて泊った洋式のや中国式のどんな旅館よりもくつろげるし、手軽でしかも安上がりというものであった。」¹⁵⁾ と回想しているのも「豪奢」より「簡素」に価値を見出し、過度の装飾を排し、より自然に近い形状を楽しむ美学を表している。

「住」についての肯定的な論義に比べ、「衣」に関する論評は少ない。特徴として挙げているのは「袴」をつけないという点である。『日本雑事詩』の注釈を受けながら、上古には「袴」があったが、その後唐代の文化にならって衣冠が改まり、筒袴から行燈袴に変わり、やがて袴の裾が大きくなるにつれて襠は低くなり、今の礼服の「袴」はほとんど裙に近いと周作人は説明している。さらに、「住」との関連で、「日本の衣裳の制はおおよそ中国に根拠し、漸次変革を遂げて今日ようになったわけで、思うに、これがその家屋にとって立居に最も便利なのだろう。今のような和服で洋室に暮すとか、中華服で日本間に暮すとかしてみても、具合はよろしくなからう。」¹⁶⁾ 着物の着心地及びこの後に続く履物「下駄」についての詳述も実体験から来ているだろうと推察できる。そして、「衣」はその民族の基本的な住環境に合致し、「夏向きだが、冬は具合がよくない」という日本家屋に対応できる「衣」の作りであることを意識した発言に思える。

「食」に関して、先ず肉が少なく、「平民がおかずにするのは、相変わらず野菜と魚介である。中国の学生が初めて日本に行き、そういう淡泊で、干からびた、コクのない飯を食わされると、すっかり魂消、そして参ってしまう。」¹⁷⁾ 一般的な日本の食事に対するこの種の感想を抱くのは周作人に限らず、他の留日学生の共通の不満だったことについてはまた後述する。そして、さらに食のもう一つの特徴として「冷たいこと」、食事の基本は熱いものとする習慣の中国人には「頭が痛くなる」現実だったようである。ここで周作人は、自分はそこまで嫌いではない、「これもちょっとした人生訓練であろうから」と皮肉を述べた後のくだりに注目したい。日本は都会文化が発展し、享楽面も向上したが、それは表面の一部で普通の生活はなお苦しい。冷飯を食うこともその一例と見て良い。比して「中国の平民生活の苦しさは今更いうまでもないが、私は中流の知識階級が少しは苦勞をしてみるべきだ、少なくともやたらと享楽を追うのはやめたものだ、というのである。」¹⁸⁾ 明言はしていないが、「食」を論ずるつながりからこの指摘は母国の「贅沢な食」への戒めにも聞こえるのである。そして、その「贅沢な食」の対極にあったのが簡素でつましく、「味気ない」日本の食事だったのかもしれない。最後に、周作人は衣

食住について次のように述べている。

がんらい衣食住は生活の最も重要な部分であって、慣れと便宜とから愛着が生じ、それが転じて優劣の判別にかかわってくる、となればここにはだいぶ主観的な要素が入っているわけだ。実際そうではかありえないので、絶対に歪みのない尺度を見つけて比べることなどほとんど不可能に近い。¹⁹⁾

「衣食住によって構成される生活様式は最も変え難く、それゆえ最も安定性を有している」という視点は前述の通りだが、主観の要素が入り込みやすく、歪みなく公正な目で優劣の判断を下すのは難しい。周作人の文を読んでいると、日本の生活を褒めるも貶すもやはり彼自身の尺度が基となり、個人の感性や美学が滲み出ている。ただ、母国の生活に見る一部の陋習が改まることを望んでいる立場から、敢えて衣食住の論議に次のような論点を加えた。「一つの生活様式を変えるのははなはだ厄介なことだし、別の生活様式を営もうと思ってもこれまた容易なことではない。」辮髪や纏足などもなかなか始末がつかない。そしてこの後、よく引用されるくだりが続くのである。

中日ともに黄色の蒙古人種であり、日本文化は古来中土に糧を取ったのもあるが、しかしその結果は似たり似なかつたりで、唐では太監を取らず、宋では纏足を取らず、明では八股を取らず、清では阿片を取ってない。これはまた何という嗜好の隔りようであろう。こういえば一層陰気な宿命観めくかも知れないが、とにかく私は、日本の選択の巧みさにもとより感心はするけれども、それと同時に、中国がいつの日にかこれらの汚れを洗い流せるだろうことを夢想するのである。²⁰⁾

敢えて陋習と言われるものを採り入れなかった日本の「選択の巧みさ」を称えながら母国の生活や習俗の改新を望んだ周作人だが、最後は再びあくまでも主観的な話であると強調し、時宜に合わない話題であるとも自覚している。両国関係の前途は希望が見えず、日本はすでに「非常時」の行動に出ている。「アジア人はついに淘汰の憂き目を免れぬか」と嘆き、「衣食住を語ってこんな結論に落ちては、じっさい真っ暗な宿命論というほかにない。」²¹⁾ 時代の影を色濃く映した文の終え方である。

2 郁達夫の「日本的文化生活」（「日本の文化生活」）

(1) 2篇の日本論

李兆忠は『看不透的日本——中国文化精英眼中的日本』（2006）の中で、郁達夫を次のように

評している。

近現代中日関係史上の悲劇的な人物として、郁達夫は我々に多くの重みを残した。彼は日本の女性および日本文化を愛したが、花開き実を結ぶことは叶わなかった。日本の作家佐藤春夫を偶像のように崇拜したが、佐藤は日本が中国を侵略した時、彼に卑劣な一撃を与えた。彼は真の戦士でもないのに、日本が無条件降伏を受諾した時期に日本憲兵によって惨殺された。(訳引用者)²²⁾

日本に対して愛憎相半ばする郁達夫の悲劇的な生涯が簡潔に表現されている。そしてこの後、郁達夫が日本留学から帰国して14年後の1936年に発表した2篇の日本論「日本の文化生活」と「雪の夜」を取り上げている。李兆忠曰く、前者を読むと、そこには1人の救い難い「日本迷」(日本狂い)、文化的「親日派」が顕現し、後者を読めば愛しても得ることができず、愛ゆえに憎む1人の「怨日派」の姿が見て取れる。²³⁾日本の文化生活に魅力を感じ、心地良さを覚える一方、愛した日本の少女からは中国人ゆえに蔑む言葉や態度であしらわれる。まさに「天国と地獄」の二重世界の様相である。

ここで1つの疑問として、郁達夫はなぜ1936年に「日本の文化生活」と「雪の夜」の2篇を発表したのだろうか。李兆忠が評するように、「雪の夜」は日本留学時に自身が蒙った数々の屈辱的な思いや「愛而不得」のやるせなさが描かれた「日本憎し」の一文とも読めるのであり、1936年という時局とも大きく齟齬を生むものではない。²⁴⁾しかし、前者の「日本の文化生活」を読むとなぜこの時期にこの内容なのか、という疑問を抱いてしまう。

「日本の文化生活」についての言及が詳しいのは楊麗雅の「郁達夫の日本論」(1993)²⁵⁾である。「日本の文化生活」は1936年9月16日発刊の『宇宙風』第二十五号に掲載されたものである。²⁶⁾楊麗雅論文はまず次の部分を引用する。

どの中国人も同じく、日本に着いた最初の何ヶ月間に、最も苦痛を感じるのは、衣食住の不便である。部屋は低くて狭い。畳の上で寝なければならない。炬燵の上²⁷⁾に置かれた料理は焼き魚か、でなければ、木の板のごとく硬いごぼうである。これは二、三十年前私達が初めて日本で勉強したときの大抵の情景である。大地震以降、都市は西洋化され、建物も当然旧観を換えた。もちろん衣食住も以前と違って来る。しかし、飲食において過度な浪費をしがちな中国人の眼に映った日本の一般国民の生活は中国人のそれには遥かに及ばない。(訳楊麗雅)²⁸⁾

楊麗雅は、比較的裕福な江南地方に育った郁達夫が最初に日本の質素な暮らしを苦痛に感じるのは自然なことだとし、九年間日本での生活を経て次第にその質素な生活に愛着を感じるよ

うになったと述べている。思うに、母国の現状や時代背景がそう思わせる大きな要素となったことは間違いないだろうが、個人的な嗜好や性格的なものの影響も皆無とは言えない。現に、郁達夫は続きの文中で、帰国して数年後病気で食欲がなくなったとき、無性に味噌汁が欲しくなり、日本の友人に作ってもらい食した結果、食欲が徐々に回復した、というエピソードを語っている。²⁹⁾そして、「これによって、日本の質素な生活の魅力を示すことができよう」³⁰⁾と結んでいる。

そして、今日「日本の文化生活」を読み、最も驚きを覚えるのは次のくだりである。楊麗雅も注目したと見え、「中国が列強の侵略と内乱に喘いでいた時代を生きた郁達夫にとって、日本の最大な魅力はその社会の安定ぶりであった」と指摘している。³¹⁾

(日本に長く住むにつれて)中国社会のどこへ行っても得られない一種の安堵感をもつようになる。それは現実の物質上の苦痛を忘れさせ、精神高揚と心気平和を得られ、知識と視野を広げるための精神食料を懸命に追い求めるようになる。

日本での滞在年数が三五年以上になると、この島国の粗茶淡飯はいちいち恋しくなる。苦しい生活、秀麗な山水、高揚な精神、整然とした秩序を回想し、日本で過ごした日々はまるで蓬莱島の仙境に身を置いたような感がある。それと比べ、中国の社会はまさしく乱雑として秩序のないものである。(訳楊麗雅)³²⁾

「日本の文化生活」は1936年に発表された一文であり、回想の形を取っている。郁達夫が留学した大正時代の日本は大正デモクラシーの全盛期であり、また一方では中国は弱国という認識が日本人の中に根付き、留学生が差別され、侮辱されていると感じることは決して少なくなかった。劉軻は著書『他者之鏡：中国当代文学中的日本』(2012)³³⁾のなかで、この時期の留学生が書いたものには、「日本人像」と「日本像」の分裂が見られ、前者は「度量が狭い」「けち」「自惚れ」「排他的」「権勢に阿る」といったマイナスのイメージが多く見られた。それは自国の不甲斐なさへの屈折した心理の表れでもあった。しかし、日本の文化や自然に対してはある種の良い感情を抱いており、彼らが描く日本の美しく、細やかな自然風景は、彼らが相對峙する日本社会の抑圧と冷酷さとの間には大きな落差が見て取れる。そして、ここでも劉軻は「日本の文化生活」のこのくだりを引き、周作人の「人情の日本」という総体評価も合わせ、長く日本に居住した留学生たちが注目したのは日本の風景、飲食、衣服、祭日、風俗、書籍、伝統などの文化生活である、と指摘している。ただし、この種の「日本賛美」には払いきれない虚無感と感傷が付きまとい、日本は美しいが「非吾土兮」、母国ではないという悲嘆も必ず付随するのである。

(2) 「生于忧患, 死于逸乐」について

前述のような日本人や日本の生活に対してアンビバレントな感情を抱いていたのは郁達夫も例外ではない。しかし、一方では自分が留学時に経験した日本の質素な生活を回想し、その意味合いの本質的な部分を指摘している。この点に関して楊麗雅の「郁達夫の日本論」(1993)も言及している。³⁴⁾ 日本の普通の国民がこのような質素儉約の暮らしをしているおかげで国全体が奮起して精進している。明治維新からまだ七、八十年しか経っていないが、日本の進歩は英仏独伊に匹敵する。憂いの中で生き、逸楽の中で死す。これが中日両国盛衰を分けた根元である。ここの原文は「生于忧患, 死于逸乐」とあり、質素儉約や精進といった日本当時の暮らしぶりは「忧患」という危機意識からきており、それは狭い国土や豊かとは言えない資源、そして地震、火山の脅威を常に抱え、戦乱や飢饉を常に憂い、いつなんどき何が起こるか分からないという心理が常時働いているからだと言えるのではないだろうか。反対に、当時の中国人の豪奢を好む傾向は危機意識の欠如から来ており、それが国の衰退につながっていると郁達夫が言いたいのである。実はこのような問題提起は他にも見られる。1932年12月30日『申報・自由談』に掲載された「说食色与欲」³⁵⁾という一文のなかで次のような論を展開している。

「食色性也」、飲食と色事は人間の本性であり、原始的な欲望であり対処は難しくない。しかし最も厄介なのは必要以上に求め、「有长无已」増幅ばかりで止むことはなく、最終的には病的なまでに膨張する「欲」である。西洋の哲学者曰く、「欲」は進化の原動力であり、欲があればこそ人間は働き、発明し、貯蓄し、社会の進化や文明を創りだす。これ即ち「欲」の良いところである。しかし、中国ではこの良い「欲」は発達せず、欲念の悪しき面ばかりが増長している。本来中国は数千年来「知足無為」をモットーにしてきた結果大きく立ち遅れたが、19世紀以降華やかな西洋物質文明が流入し、長きに渡り「知足無為」の退屈さに耐えてきた中国人は極端な「無欲」から極端な「欲」へと跳躍したのである。その結果、欲望の洪水が狂奔し、創造は彼ら西洋人に任せ、わが民族は享楽にのみ興じるという状態になったのである。そして、日本はじめ帝国主義各国の軍隊が堂々と中国に侵入してきてはじめて目が覚めるのである。憂国の士は物質文明が中国を破壊したと言い、急進的な者は先賢先哲が中国の弱さの悪しき根源だと主張する。

このように郁達夫は飽くなき「欲」が中国に災いをもたらし、国を滅ぼすと指摘したが文の最後に次のように付け足すのである。西洋物質文明が同時期に東洋を侵食したが、日本はその良い面を採り入れ、中国は悪い面しか手に入れなかった。例えて言うなら、一個の胡桃を日本人が実を取り、中国人は皮だけを取ったようなものだとしている。1932年に書いたこの一文からも、「日本の文化生活」の「生于忧患, 死于逸乐」につながる警告のような思いが感じられる。日本の生活を論じる目的が那邊にあるかが推察できるのではないだろうか。

(3) 「清淡中出奇趣，簡易里寓深意」

「日本の文化生活」の中で、郁達夫が「清淡中出奇趣，簡易里寓深意」³⁶⁾という表現で日本の文化生活の特徴をまとめている。日本人も享樂を求めますが、その中身は見栄を張らず、大局に支障が来さないところに留めるといものである。「清淡」（色合いが薄くあっさり）であるが妙味を醸し出し、「簡易」（簡単）であるが深い意味を寓する。「清淡」「簡易」はこの後の内容にほぼ共通項として読み取れる。文学では字数を極端に制約した和歌と俳句、能楽、歌舞伎、浄瑠璃では三味線、鼓によって奏でられる単調なリズム、日本舞踊のゆったりとした舞い、すべてにおいて複雑でもにぎにぎしいものではないが、「以単純取長，以清淡制勝」，単純が長所となり、あっさりとしたところが他に優る特徴になるとしている。また、国民がこぞって花見、潮干狩り、螢狩り、紅葉狩りなど野外に集い、自然を楽しむ習慣を挙げ、中国人は及ばない点だとし、元日の門松、端午の節句の鯉のぼり、七夕の星祭り、盆踊り、重陽節といった年中行事は、元来中国発祥のものだが、日本に伝来すると国民的行事として定着している。現在母国ではそこまでの隆盛が見られないことを残念がると共に、豪奢でなくとも四季の移ろいのなかで享樂を見出すことが出来ると述べており、日本生活が長かった郁達夫ならではの指摘である。

日本家屋に関して前述の周作人のような詳細な評はなかったが、代わりに次のようなくだりが目を引くのである。

日本人の庭園建築，寺院仏塔はまたある種の精微かつ簡潔さ，単純さのなかに趣を装う芸を有している。家々の厠の傍にさえ，水溜を設え，数本の南天を植え，窓もひさしも洗い清められ，嫌な臭気が鼻につくこともない。（訳引用者）」³⁷⁾

ここでも強調されているのは精微かつ簡潔，そして清潔さである。住居のなかでも敢えて厠のまわりの造りを取り上げているのは極めてユニークな着眼点であり，実際の生活体験がなければ浮かばない発想である。この後も茶道は最も優雅な趣味ごとであり，生け花については，

また生け花の生け方といえば，日本では流派によって継承された妙技である。一つの素焼きの器，あるいは一つのきれいな花瓶に，数本の色とりどりの花や枝を挿し，そこに砂や岩石を飾りに盛り，小さな囲いからは無数の配合を見出すことができる。多くの費用を掛けず，居室が華やぐのだから，何という経済的で美しい家庭装飾だろう！（訳引用者）」³⁸⁾

今日の生け花を思うと決して簡素で経済的とは言えない存在だが，本来ならもっと身近で普通の生活を潤すものだったことを郁達夫の賛辞で認識させられる。「日本の文化生活」を読むと，数十年経過しても作者が懐かしく思い出すのはどんな日本なのかが浮かんでくる。前述の李兆忠の救い難い「日本迷」（日本狂い）を感じずにはいられない。

そして、その思いが強烈な反動になって1930年代後半から1940年代にかけての熾烈な日本批判を生むのである。知り過ぎた故に裏切られた思いの深さ、憎しみの発露を綴った後年の文を読み、郁達夫の悲劇的な最期と重ねて考えた場合、このように深く日本を知る人物を抹殺した者を許せない感情に駆られるのである。

最初になぜこの微妙な時期に「日本の文化生活」を書いたのかという疑問を呈したが次のような背景があった。「日本の文化生活」の文末には「1936年8月福州にて」と記され、1936年9月発刊の『宇宙風』第25期に掲載されたものである。この『宇宙風』第25号の特集が大きな動機づけになっているのは間違いないようであり、この点については次章で述べることとする。

3 『宇宙風』の「日本と日本人特集」に見る「日本の生活」論

(1) 「日本と日本人特集」について

2016年4月より、『日中の120年文芸・評論作品選』全5巻（張競・村田雄二郎編集 岩波書店）が刊行された。1894年から1972年以降の今日までという約120年間に渡る日中双方の代表的な言論人の文芸・評論作品を紹介している。作品全篇あるいは一部分という違いはあるが、複雑かつ激動の時代を背景に、両国の言論人の発言をクロスさせ、関連性を明確にして配列している。特に、中国側の文献は新たに日本語訳されたものも多く、資料価値が増している。

そして、第2巻『日中の120年文芸・評論作品選 2 敵か友か 1925-1936』に「知日派たちが見た日本」「比較の中の日本人論」という2章があり、『宇宙風』第25号の「日本と日本人特集」から数篇採られている。編者の1人村田雄二郎は巻末の解説のなかで、この特集が組まれるようになった時代背景を分析している。

上述したように、清末の時期には多くの留学生が日本を訪れ、また亡命知識人も日本に長期滞在した。ただ、かれらの手で書かれた日本論となると、皆無に近い。日本論や日本人論が中国人の手で著されるようになるのは、一九二〇年代なかば、日中関係における短い小春日和の季節を迎えてからである。この時期になると、二十一カ条要求で悪化した対日感情もやや沈静化し、経済や文化の面で両国関係が好転しはじめる。それにしたいが、日本を正しく認識し、理解すべきだという考えが知識人の間に芽生え、大手新聞や総合雑誌に日本の文化や歴史に関する文章が掲載されるようになる。³⁹⁾

さらに、この時期の日本論は日本人の国民性・民族性を論じたものが多く、戴季陶の『日本論』（1928）をはじめ、謝晋青の『日本民族性研究』（1924）、王朝佑の『我之日本観』（1927）、潘光旦の『日本独意志民族性之比較的研究』（1930）などが発表された。村田雄二郎によると、満州事変以降、日本の大陸侵攻の事態が日本研究ブームをさらに加速し、抗日や救国を叫ぶナ

シヨナリズムの高揚の一方で、客観的で等身大の日本を認識し研究しようという傾向が広まった。驚くことに、第一次上海事変（1932年1月28日）以降、一時激減した留日学生が1934年から回復し、1935年11月には清末の留日学生数に匹敵するくらいの規模になった。⁴⁰⁾『宇宙風』第25号の「日本と日本人特集」はこのような背景のもと企画されたようである。以下村田雄二郎の評である。

そのなかで、多くの日本論は日本での実地体験や日本人との交際を通して、広がりや深みをみせるようになる。その頂点をなすのが、上にも触れた『宇宙風』「日本と日本人特集」号であろう。抗日意識の強弱を問わず、個々の論者の観察や表現の妙において、ここに掲載された作品群は、おそらく近代中国が生み出した日本文化論の白眉であり、残念ながらこれを超える質の日本論はその後書かれなかったというべきである。⁴¹⁾

極めて高い評価を下している。『日中の120年芸文・評論作品選 2 敵か友か 1925-1936』に収められている数篇を読んだ印象もこの評価に違わない。ただ、『宇宙風』の「日本と日本人特集」は25号が「上」とされ、18篇が収められており、次号の26号が「下」とされ、14篇が掲載されている。当時、この特集を組むにあたり、『宇宙風』は前の号に原稿募集の記事を掲載している。

周作人先生は民国十四年に「日本と中国」という一文を書き、その中にこのような一節がある。「中国には、その独特な地位からして、特に日本を理解する必要と可能性とがある。だが事実はさにあらず、みな日本文化を軽蔑し、昔は中国を、今は西洋を模倣しているだけで一見の値打ちもない、くらいに心得ている。なるほど日本の古今の文化が中国与西洋に取材していることは本当だ。しかし一通りの調合を加えてそれを自分のものとしたところは、あたかもローマ文明がギリシャより出てから自から一家を成したのと同じである。したがって日本に固有の文明があるといっても何ら差し支えはなく、それは芸術と生活の面において特に顕著である。ただし、哲学思想と呼べるほどのものは何もないが。わが中国はそれを一個の民族文明として公平に研究するばかりか、さらに特別な注意をはらうべきだ。というのは、そこに、私どもが本国の古今の文化を研究する際の参考となるが多々あるからで、かように実利の点からいっても、日本文化は中国人にとり今日ないがしろにできぬ研究対象なのである。」周先生のこの発言から今日まですでに十数年経過している。中国人の日本文化研究は当然だが従前より大きく進歩している。本誌は1周年記念の九月特大号にて「日本と日本人」特集を組む。40頁から60頁をさき、日本の思想と生活その他を研究している国内の先生方に研究成果を発表する場を供する予定である。⁴²⁾

周作人の「日本と中国」が発表されたのは民国十四年、1925年であったが、1936年の段階で編集者の1人陶亢徳⁴³⁾は周作人にも原稿依頼をし、周作人もそれに応じ「知堂」のペンネームで25号に「懐東京」、26号に「懐東京之二」「談日本文化書」を寄稿している。しかし、「談日本文化書」(日本文化を語る手紙)その二は、陶亢徳への返信という形を取り、冒頭には『宇宙風』の「日本と日本人特集」について「憂慮している」「おそらく失敗するだろうとの確信がある」とさえ記している。その理由として、目下中国が日本に対し怨念しかなく、「二十年来、中国の前に現れた日本の面貌は、全てが人食いの顔でした」、日本に対して我々の恨みと軽蔑の念を表してもやり過ぎとは言えないだろう、このような時局において「比較的公平に」日本の国土と人民について議論することは容易ではないと、周作人は述べている。そのうえで、周作人は日本という国家を知るために、いわゆる英雄に注目することも必要だが、「英雄の多くは善人ではなくとも、悪事をなす能力があり、彼の能力は世界を震撼させるものであり、人類に苦い経験をさせ、歴史を変えることができます。だがもしこの民族の代表を探し出して、彼らの悲喜苦楽について知ろうとするならば、小さな路地の長屋にまでたずねて行くべきでしょう。」⁴⁴⁾ 怨念を完全に排して日本や日本人を論じる難しさを憂慮しつつ、周作人の「小さな路地の長屋にまでたずねて行くべき」という表現は注視に値する。そこにあるのは普通の日本庶民の「生活」への視線であり、前述の「日本管窺の二 日本の衣食住」(1935)に通底するように感じる。

(2) 「日本の生活」を論じる

1936年発刊の『宇宙風』の「日本と日本人特集」は上下合わせ約32編の寄稿があり、前述の村田雄二郎の評の通り、「おそらく近代中国が生み出した日本文化論の白眉」であるならば、従来の先行研究を調査し、検討する価値は充分あると考える。ただし、本稿では全体を俯瞰する余裕はなく、今後の課題としたい。ここではまず「日本の生活」を論じたものを二三取り上げたい。

「住」に関しては夏巧尊の「日本の障子」が代表的である。『日中の120年文芸・評論作品選2 敵か友か 1925-1936』のもう1人の編者張競の解説によると、夏巧尊は魯迅より五歳年下で、日本留学も魯迅より2年遅れの1904年だった。⁴⁵⁾ 「日本の障子」は留学したときの生活体験にもとづいたものであり、「かれが注目したのは日本の家屋に見られる雅やかな情趣であり、風流を楽しむ心である。」「日本の伝統文化は中国文化の亜流という、当時ひろくあった先入観を暗に批判しているところは周作人と共通しているが、夏巧尊の場合、日本の生活のなかの美意識を例に挙げて称賛したところがユニークである。」⁴⁶⁾ この評価には納得しつつももう少し具体的な内容に触れてみたい。夏巧尊はまず、「障子」は「格子に糊で紙を貼りつけた窓戸」であると説明したうえで、ガラスに比べその良さを次のように語っている。

日本人は床面に直接坐るので、室内にはテーブル、椅子、オンドルなどの家具はない。空

の部屋には天井、壁、畳の他にあっては障子だけである。障子はいつも周りを囲んでおり、ガラス窓のように外から室内が見られることなく、比較的静かである。日の光は室内に差し込み、照明の明るさは部屋の外まで映り、柔らかな感じで人をひきつける。影を切りとったように輪郭が鮮明な人影が更に風情豊かにする。これは日本以外、どこにも見ることはできない。⁴⁷⁾

障子が光を通す様子をガラス窓と比較しているが、その良さについては恐らく好みが分かれるところだろう。前述の張競がいう「日本の家屋に見られる雅やかな情趣であり、風流を楽しむ心」とは、障子によって採光がストレートではなく、一度屈折して影をつくり、陰翳が生かされること指しているのではないだろうか。さらに、この後障子が人を惹きつける理由を四つ挙げている。「第一に枠の穴が大きくて棧が細く、見るからに簡単でわかりやすいことだ。」「また第二の理由は漆を塗っていないことである。」「第三の理由は、作りが緻密で開け閉めも簡単であることだ。」「第四の理由は、紙質が良いことである。」四つの中で特に第二の理由に注目してその続きを引用する。

日本の家屋は一般にたとえ柱や天井、廊下の板、階段でも、木地はもとの自然の色のままで塗料を塗らない。障子の棧も原色で、木地は時間が経つと楠のような薄茶色になり、のり張った白い紙と、色の調和がよく取れる。⁴⁸⁾

前述の周作人の日本家屋評とはまた異なる指摘である。障子の棧は木地に塗料を塗らず、原色のままと保つという点は、確かに中国や西洋の家屋の色彩と違い、際立った日本家屋の特徴に思える。禅の思想などが根底に流れている寺院なら当たり前と理解できても、一般家庭の家屋もそれを汲んでいるところに興味と好感を抱いたのだろう。日本の住居を論じるに当たり、「障子」に目を付けたのは確かに「ユニーク」であり、「日本の住居」の特徴を語るにはとても効果的であると感じる。次のくだりは日本家屋よりさらに視野を広げた評になっている。

日本には、あっさりしていて上品な趣のあるものがとてもたくさんある。盆栽、生け花、茶道具、日本庭園の造り方、点綴された風景など誰もが称賛するものである。私はその最たるものこそ障子であると思う。もし障子がなかったら、おそらくあらゆる情趣が変わり、庭園だけでなく風景までもが日本固有の趣を失い、生け花、茶道など本来の風雅な興趣もうまく調和しないであろう。⁴⁹⁾

簡素だが緻密であり、過度の色彩を排し、シンプルだが上品である。このように夏草尊は「日本の障子」という一文を通して1文人が感じた「住」における「日本の情趣」を伝えようとし

たのである。

同じく『宇宙風』25号の中で目を引くのは、傅仲濤の「日本民族の二、三の特性」である。『日中の120年文芸・評論作品選 2 敵か友か 1925-1936』巻末(p.314)によると、傅仲濤は1896年生まれで、1925年に日本に留学し、京都帝国大学文学部を卒業、帰国後は国立北京大学などで日本文学を講じている。「日本民族の二、三の特性」については、前述の編者村田雄二郎は「留日組の鋭い観察眼がひかる、透徹した日中比較文化論である」と評している。周作人に師事し、「両国の文化の表面的な類似性に惑わされずに、虚心坦懐にまた複眼的視点から日本の民族性の特質を具体的に描写する筆致は、まさにかれが周作人の日本観察の正統的な継承者であることを物語っている。」⁵⁰⁾ このように称賛された「日本民族の二、三の特性」をひもといてみると、前半は日本の歴史の沿革を中心に日本民族の特性の起因するところを分析し、日本人の性質について詳細に意見を述べている。たとえば鎌倉幕府から始まった「軍人政治」は日本民族の思想や精神に決定的な影響を与え、「尚武・有為・果敢・積極・剛毅・緊張・真面目」という良い面と、「残忍・殺伐・短気・狭量」という欠点も作りだした、としている。このような日本人評や日本論は今日においても多く目にするが、その内容や着目点が80年経過しても驚くほど相似している点を思い知ったのである。

「日本民族の二、三の特性」の後半で、日本人の生活に触れた部分もある。まず、日本人は模倣が得意であり、外国の文化を取り入れ、変化させることに長けているとしたうえで、漢字や衣冠の例を挙げながら、次のように述べている。変化は決して気ままなものではなく、一貫した精神がある。それが「日本の自我意識である。この自我意識は矛盾した文化をすべて一つにまとめ上げ、複雑なものを簡単に、難しいものを平易に、凝り固まったものをなめらかさに変えるのである。」⁵¹⁾ さらに次のくだりは前述の周作人の日本論を想起させる感がある。

彼らはもとより複雑なものを簡単なものに作りかえ、込み入ったものを平易なものにすることを好む。それと同時に、彼らの仕事はきわめて精巧、微妙、繊細なのである。この点は、確かに彼らの独壇場である。こうした精細なところは、日本人の文学、美術、工芸、建築、服飾などの中に無数の証拠を見つけることができる。(中略)日本人の繊細、精巧は、しばし神経質なほどで、きわめて敏感でもあり、複雑、煩瑣ともなる。この複雑さは精細さから来るものであるから、全体としての統一感はあるが、規模の大きさには欠けている。このような例は、日本人のあらゆる物づくりや生活の中に見出すことができる。⁵²⁾

『宇宙風』の「日本と日本人特集」に限らず、日本人の生活を観察して得た肯定的な印象は似通っているものが多い。「複雑なものを簡単なものに作りかえ、込み入ったものを平易なものにする」「繊細で精巧」、神経質に感じるほど細かい、という賛辞が多く見かける。そして、この作者は日本文化の特徴について、「必然的な副産物として唯美主義となり、ひいては耽美主義に

陥る」と指摘した後に続ける。

この唯美主義の精神は日本人のあらゆる作品や生活の中に見られる。例えば日本料理は、三分の二は目で楽しむものである。また日本人の家屋はこぢんまりとよくできているが、住んでみて居心地がよいというより、見た目が美しいのが特徴である。それは中国の家屋で好まれるたくさんの透かし彫りの花や朱を塗りたくった色彩画などとは違う。日本人が好むのは、木材をすべすべになるまで削ったり、美しい木目が見えるようにしたり、あるいはわざと斧の痕を残したりしたものである。彼らが好む美しさは華美ではなく優美であり、枯淡で飾り気のない素朴さである。彼らの小さな庭には一面の青苔が好まれ、池を掘るにも石を置くにも自然の趣とよく合うものが選ばれる。⁵³⁾

日本家屋についての描写は前述の周作人「日本の衣食住」や夏丐尊「日本の障子」を彷彿させるものがある。木目の美しさを好み、「華美ではなく優美」「枯淡で飾り気のない素朴さ」など、往年来日した留学生が等しく気づいた母国の家屋との違いだったのだろうか。

最後に、『宇宙風』26号の「日本と日本人特集 下」に収められている胡行之の「印象中的日本」（日本の印象）にも触れてみたい。日本人の唯一の長所は他の文化を模倣し、自分のものに作り変える点だとしているところは、他の日本人論に相似している。その中で目を引くのは、刻苦、儉約、忍耐という日本人の生活ぶりを強調している点である。前述の郁達夫「日本人の文化生活」にもあるように、「生活は苦しいが、至って合理的である。家は狭いが風通しはよい。衣食はみすばらしいが極めて清潔であり、特に入浴を大事にしている。」⁵⁴⁾他にも、清潔や秩序についての記述は特集の他の文章にも多く見られる。『宇宙風』「日本と日本人特集」以外にも、たとえば王文萱の「日本国民性」（南京：国民評論社 1933年）には、「清潔を愛する」という1節を設け、入浴好きの風習と掃除が行き届き、「貧富を問わず、いつも清潔だ」と評している。⁵⁵⁾現代の訪日客が抱く感想と80年前のものがここまで類似しているのか、と戸惑ってしまう。この戸惑いの本体は果たして何だろうか。それは恐らくいささか肩唾物という感もあるが、今日、日本が世界にアピールし、また評価されているいわゆる生活文化の長所が80年前に称賛されていたこと。戦後経済成長により豊かな人間生活が結実し、利便性が格段に向上した賜物だという認識だけでは説明できない中国人の日本論を目にしたからである。

終わりに

近代以降、中国の文化人による日本研究の中で、歴史、政治、経済、国際関係などが研究対象の主流であった。近現代日中両国の不幸な関係史を顧みると、問題意識の重要性、時代の要求に応じる有効性からしてある意味必然的であろう。その中で、中国の文化人が「日本の生活」

を如何に論じたか、という1つの側面を取り上げることに、「避重就轻」（重要な点を避けて二次的なものを取り上げる）の謗りを受けるかもしれない。しかし、生活という人間共通の基本が文化論の隅に追いやられるのはむしろ時代の不幸である。本稿の最初に触れた周作人の「衣食住によって構成される生活様式は最も変え難く、それゆえ最も安定性を有している」という視点をここでもう一度思い出したい。文化の根本は意外にもこういうところにある、という認識は軽薄だろうか。今日の訪日客が日本の何を求めて来訪しているのかを考える時、「生活を論じる」は決して瑣末なことではなく、むしろ互いを知り、好感を育て、理解を深める大切なアプローチではないだろうか。

本稿は周作人や郁達夫などの日本研究から何篇かを考察の対象とした。視野は限られたもので触れられなかった著作はまだ多く残っている。特に、今回は「日本の生活」についての論考を選ぶに当たり、敢えて「衣食住」に関するものを優先した。郁達夫の「日本の文化生活」には俳句、和歌、能楽、和楽器、茶の湯、生け花、また他の作者の著作には日本人の生活と宗教の関係なども言及されていたが、本稿では深入りすることはしなかった。また、次の課題としたい。さらに、1930年代発刊の雑誌『宇宙風』の「日本と日本人特集」について今後も引き続き検討し、中国文化人の日本研究の様相を明らかにしたいと考えている。

注

- 1) 周作人『苦竹雜記』1935年6月
- 2) 銭理群『读周作人』天津古籍出版社 2001年10月 pp.46-47
- 3) 前掲書。 pp.47-48
- 4) 伊藤徳也『「生活の芸術」と周作人 中国のデカダンス=モダニティ』勉誠出版 2012年3月
- 5) 前掲書。p.005
- 6) 前掲書。p.010
- 7) 前掲書。p.011
- 8) 前掲書。p.016
- 9) 周作人著 木山英雄編訳『日本談義集』（東洋文庫701 2002年3月）p.192
- 10) 同上。
- 11) 周作人著 木山英雄編訳『日本談義集』（東洋文庫701 2002年3月）p.193
- 12) 前掲書。p.194
- 13) 前掲書。p.195
- 14) 前掲書。p.196
- 15) 同上。
- 16) 周作人著 木山英雄編訳『日本談義集』（東洋文庫701 2002年3月）p.198
- 17) 前掲書。p.201
- 18) 前掲書。p.203
- 19) 前掲書。p.204
- 20) 前掲書。p.205
- 21) 前掲書。p.206
- 22) 李兆忠『看不透的日本——中国文化精英眼中的日本』东方出版社 2006年12月 p.92

- 23) 同上。
- 24) 「雪の夜」については『日中の120年文芸・評論作品選2 敵か友か1925-1936』（張競 村田雄二郎編 岩波書店 2016年4月）に「雪の夜」の日本語訳が収められている（pp.73-76） また、劉舸『他者之鏡：中国当代文学中的日本』（2012）p.162 張淑琴「郁達夫の日本観」（1998）p.76 楊麗雅の「郁達夫の日本論」（1993）p.23 などに言及されている。
- 25) 楊麗雅の「郁達夫の日本論」『文学研究論集 10』（1993）pp.137-150
- 26) 『郁達夫文集 第四卷：散文』花城出版社 生活・读书・新知三联书店香港分店 1982年7月 pp.156-161
『宇宙風』第二十五号の目次ではタイトルが「日本人の文化生活」とあるが、本文は「日本の文化生活」というタイトルになっている。恐らく編集過程でミスが生じたのだろう。
- 27) 楊麗雅の訳文では「炬燵」となっているが、原文の「四脚高盘」はめいめいの前に据えられた膳と推測する。
- 28) 楊麗雅の「郁達夫の日本論」（1993）p.141
- 29) これに似たエピソードは郁達夫の日記にも記載されている。1927年5月11日の日記に下痢が止まらない、と言う記載があり、その後の数日間も医者から肉や卵を止められた、あまり食欲がない、と綴っていた。5月25日の日記には、虹口の日本料理屋で朝食をとり、久しぶりに口にした味噌汁はとても美味しく、「很合我的胃口」とある。『郁達夫散文 中』（中国广播电视出版社 1992年）p.413
- 30) 楊麗雅の「郁達夫の日本論」（1993）p.142
- 31) 前掲書。p.141
- 32) 前掲書。pp.141-142
- 33) 劉舸『他者之鏡：中国当代文学中的日本』湖南大学出版社 2012年8月 pp.21-22
- 34) 楊麗雅の「郁達夫の日本論」（1992）p.142
- 35) 『郁達夫文集 第八卷：政論・雑文』花城出版社 生活・读书・新知三联书店香港分店 1982年7月 pp.68-70
- 36) 『郁達夫散文 中』（中国广播电视出版社 1992年）p.227
- 37) 前掲書。pp.229-230
- 38) 同上。p.230
- 39) 『日中の120年文芸・評論作品選2 敵か友か1925-1936』（張競 村田雄二郎編 岩波書店 2016年4月）pp.292-293
- 40) 前掲書。p.297 なお未見だが、村田雄二郎によると、この点について徐氷『20世紀三四十年代中国文化人的日本認識——基於<宇宙風>雜誌的考察』が詳しい。
- 41) 前掲書。p.298
- 42) 『宇宙風』合訂本第二卷 総十三至二十四 p.451 訳は引用者。ただし、周作人「日本と中国」から引用された一節は周作人著 木山英雄編訳『日本談義集』（東洋文庫 701 2002年3月）p.59から引いた。
- 43) 『日中の120年文芸・評論作品選2 敵か友か1925-1936』（張競 村田雄二郎編 岩波書店 2016年4月）の註（p.84）によると、陶亢徳（1908～1983）は魯迅・周作人兄弟と同じ浙江省紹興の人。雑誌『生活』『論語』『人間世』の編集に関わった後、林語堂と共同出資して『宇宙風』を創刊した。日中戦争勃発後も上海に残り、1943年に開かれた大東亜文学者大会に参加し、戦後は「文化漢奸」として断罪された。
- 44) 『日中の120年文芸・評論作品選2 敵か友か1925-1936』（張競 村田雄二郎編 岩波書店 2016年4月）pp.81-84
- 45) 前掲書の巻末（p.313）にあるように、夏丐尊（1886-1946）浙江省上虞の人。教育家、文学者。1905年来日し、弘文学院、東京工業学校などで学ぶ。中国で日本文学を最も早く紹介した一人で、田山花袋「蒲団」「国木田独歩集」などの翻訳がある。1939年、雑誌『月報』を創立し、社長となる。著書

に『文芸論 ABC』、散文集『平屋雑文』など。

- 46) 『日中の 120 年文芸・評論作品選 2 敵か友か 1925-1936』(張競 村田雄二郎編 岩波書店 2016 年 4 月) p.290
- 47) 前掲書。p.92
- 48) 前掲書。p.93
- 49) 同上。
- 50) 『日中の 120 年文芸・評論作品選 2 敵か友か 1925-1936』(張競 村田雄二郎編 岩波書店 2016 年 4 月) p.208
- 51) 前掲書。p.164
- 52) 前掲書。p.165
- 53) 前掲書。p.166
- 54) 『宇宙風』合訂本 25-35 (1936-1937) 26 号 p.146 訳引用者。
- 55) 『日中の 120 年文芸・評論作品選 2 敵か友か 1925-1936』(張競 村田雄二郎編 岩波書店 2016 年 4 月) p.144

参考文献

- 黄遵憲『日本雜事詩』実藤惠秀 豊田穰訳 東洋文庫 111 1968
- 『周作人文類編⑦ 日本管窺 日本・日文・日人』鐘叔河編 湖南文芸出版社 1998
- 周作人『日本談義集』木山英雄編訳 東洋文庫 701 2002
- 銭理群『読周作人』天津古籍出版社 2001
- 伊藤徳也『「生活の芸術」と周作人 中国のデカダンス=モダニティ』勉誠出版 2012
- 『周作人と日中文化史』伊藤徳也編 勉誠出版 2013
- 劉岸偉『東洋人の悲哀 周作人と日本』河出書房新社 1991
- 劉岸偉『周作人伝 ある知日派文人の精神史』ミネルヴァ書房 2011
- 『郁達夫文集 第四卷：散文』花城出版社 生活・读书・新知三联书店香港分店 1982
- 『郁達夫文集 第八卷：政論・雜文』花城出版社 生活・读书・新知三联书店香港分店 1983
- 『郁達夫散文 中』中国广播电视出版社 1992
- 大東和重『郁達夫と大正文学 <自己表現>から<自己実現>の時代へ』東京大学出版会 2012
- 『日中の 120 年文芸・評論作品選 1 共和の夢 膨張の野望 1894-1924』張競 村田雄二郎編 岩波書店 2016 年 3 月
- 『日中の 120 年文芸・評論作品選 2 敵か友か 1925-1936』張競 村田雄二郎編 岩波書店 2016 年 4 月
- 『宇宙風』合訂本 25-35 (1936-1937)
- 孫雪梅『清末民初 中国人的日本观——以直隶省为中心』天津人民出版社 2001
- 尚会鹏『中国人と日本人 社会集団, 行为方式和文化心理的比较研究』北京大学出版社 1998
- 李兆忠『看不透的日本——中国文化精英眼中的日本』东方出版社 2006
- 刘舸『他者之鏡：中国当代文学中的日本』湖南大学出版社 2012
- 李怡『日本体验与中国现代文学的发生』北京大学出版社 2009
- 彭雷霆『近代中国人的日本认识 (1871-1915)』社会科学出版社 2013

Why we discuss about the “Japanese lifestyle”

Kaori HATAKEYAMA

Abstract

In this paper, I will discuss about how the characteristics of the Japanese lifestyle have been evaluated in studies of Japanese culture by Chinese researchers. Although many studies of Japanese culture have been performed by cultured Chinese people who studied in Japan for a long period, naturally, their studies they have mainly discussed were history, philosophy, society, international politics, and other aspects related to ethnic sentiments, due to their resentments concerning the unhappy relationship between the two countries during and after the modern period. In this paper, we recognized such a trend and then picked up points of view about lifestyles based on more general aspects of human life, to discuss why and how cultured Chinese people have examined Japanese lifestyle. Regarding “*Riben guankui*” and other works of Zuoren Zhou, “*Japanese cultural life*” by Dafu Yu, and discussions in magazines in the 1930s, we will discuss what kinds of characteristics of Japanese lifestyle were picked up and how the characteristics were evaluated, criticized, and compared with those of Chinese lifestyle. Furthermore, I will also refer to the opinions of present-day Chinese researchers on such typical discussions of Japanese culture from that period.

Keywords: Lifestyle, Zuoren Zhou, “Japanese food, clothing and housing”, Dafu Yu, *Yuzhoufeng*